

グッドプラクティショナー 紹介

推薦文

大原裕介さんをグッドプラクティショナーに推薦する理由
 ——FUKUSHI を世界に発信する——

大原裕介氏は、学部・大学院ともに本学の同窓生である。その姿は、本学の在学生のみならず、魅力ある福祉の創出を目指す若者たちにとっての1つのロール・モデルである。

「ボランティアから町の救世主へ」とは、湯浅誠（2014）「この国を救う『新しい日本人』」（『文芸春秋 92(6)』）の記念すべき第1回に大原氏が取り上げられた時のサブタイトルである。大原氏のフィールドは、この17年の間に、本拠地（北海道石狩郡当別町）における多角的展開のみならず、隣接する江別市や東京・品川、さらには海外にまで拡張されている。その内容は、いわゆる福祉サービスをはじめ、当

事者が主役となる芸術文化活動プロジェクト等々枚挙に遑がないほどである。

最後に、大原氏が委員として参画した直近の検討会をご紹介したい。昨年12月26日に最終とりまとめが公表された「地域共生社会に向けた包括的支援と多様な参加・協働の推進に関する検討会」である。これを踏まえて現在開催中の第201回国会に提案されたのが、東ね法としての「地域共生社会の実現のための社会福祉法等の一部を改正する法律」である。

（推薦者：学会副会長・北海道医療大学教授
 志水 幸）

〈グッドプラクティショナーについて〉

1 背景と目的

- ・よりよい実践を発掘・評価し、広く伝えることにより、よりよい実践が拡大することを目指す。
- ・よりよい実践を行っているソーシャルワーカーの仕事ぶりを紹介することによって、よりよい実践とは何か、よりよい実践のためには何が必要か、などについて読者に考えていただく契機を提供する。
- ・これにより、ソーシャルワーク学会として、理論の発展だけでなく実践の向上を、また、理論と実践の往復運動の促進を目指す。

2 方法

- ・推薦者から候補者名をあげていただき、その推薦理由（200～400字程度）を書いていただく。合わせて、候補者に執筆の承諾をとっていただく。
- ・候補者は学会員以外でも可能。執筆内容は「実践内容」。
- ・承諾を得られた候補者には、編集委員会から「私の実践：ー」といったタイトルで、実践内容を紹介していただくように依頼する（3,200字程度）。

私の実践

ソーシャルワーカーとはなにかを問い続ける

大原裕介（社会福祉法人ゆうゆう）

1. はじめに

社会福祉法人ゆうゆうの前身団体は、平成15年に立ち上げた北海道医療大学学生ボランティアセンターである。センター運営するに際して、地域のニーズ調査から始めることになり、そのなかで福祉的サービス資源が乏しいがゆえに様々な困難を抱えている障害児とその保護者と出会う。保護者の中には現状の不安とともに気持ちと親亡き後の悲観的なリアルな声を聴き、実態を把握することができた。学生という立場で実施できるサービスは限られているなかで、障害児者を対象としたレスパイトサービスを立ち上げ、その後3年間運営をしてきた。

2. 福祉を可視化する。

サービス提供のなかで、特に私たちが苦勞したことは保護者が障害児であるわが子の存在を隠したいという実態が存在するというものであった。できれば人目のつかないところでサービスを提供してほしいという保護者と幾度も対峙してきた。保護者の想いは理解しつつも、違和感を感じていた私たちは建物のなかだけ支援ではなく、「あえて」、地域に飛び出し、地域全体を資源と考えたサービスの可視化に努めた。

サービスの可視化は、障害児者と地域住民との自然な出会いを創出することにつながり、お互いの存在を認知し、声を掛け合う関係性が着実に構築された。保護者も自分の子どもに「大きくなっ

たね」と声をかける知らない地域住民の存在に出会い、閉ざされていた心が少しずつ柔らかくなっていくことにも繋がる。

3. 現場にしか答はない。

私は、この経験から専門家の限界と非専門家である地域住民との繋がりを結んでいくことが障害者等の自立を推進するものであると体感的に学ぶこととなる。

福祉の現場に身を置いていると一般的な感覚を忘れがちになってしまう。マイノリティーという存在が地域社会の中でつながりどころか認知すら推進されていない実情を捉えていかななくてはならない。福祉という営みが異質性を放っていることも自覚しなくてはならない。その実情や実感を踏まえ、一方的な普及や啓発活動をしても距離は縮まらない。むしろ、私たち非日常の福祉現場で営まれる「支援」には限界があり、日常生活に福祉を浸透させていくことを意識し、非専門家と呼ばれる地域住民の方々に委ねることができるのではないかと探索していくことが必要である。そのような営みが風景となっている地域では自分の弱さや困りごと、生きづらさを自らが発することができ成熟した社会の実現につながるのではないだろうか。社会で仕事をする私たちのソーシャルワーカーとしての価値創造につながる気もする。そして、私は「繋がりを結ぶ」ために最も必要なスキルは「ケアの技術」であると考えている。どんなに優れたアイデアや構想が掲げられたとしても、結ぶための技術がなければ、絵に描いた餅に

しかならない。机上では磨くことができず、現場にしか答がないと言っているのは、ここが所以である。

4. 支えると支えられるは断らないことから生まれた

サービスの可視化は、もうひとつ新たなシステムを生み出すこととなる。障害児と大学生がともに過ごす光景がまちなか日常になった頃、個人や様々な機関から、自分たちもサービスを使えないのか、という問い合わせが相次いだ。乳幼児や不登校の子どもに対する学習支援、要介護者レスパイトなどのニーズであった。困りごとに年齢や障害種別等は関係なく、公的制度だけでは漏れゆく全世代対応型のサービス提供の必然性を感じる3年間であった。

私たちは、今思うと無謀であったが、様々なボランティアニーズに対して「断らない」ことをミッションに掲げていた。無論、ボランティアニーズなので、高い専門性や命に関わる問い合わせがなかったことが前提である。

そのような中で、どうしても応えることができないサービス依頼を受けることとなった。まだまだ保育サービスが未整備であったこともあり、現状では見当たらない支援かもしれないが、0歳児の預かり支援の依頼を受けた。子育てどころか、結婚すらしていない私たちは、こればかりはどうにもならないと諦めざるを得ない結論を出そうとしたときに、普段支えられる側にいる障害児の保護者にサービス提供の依頼をしてはどうかというアイデアが出された。

しかしながら、当時、発達障害は先天性ではなく子育ての仕方の問題があると云われていた時代の中で、自分の子育てに自信が持てていない保護者にそれを委ねていくことに対する抵抗感もあった。そうはいつても待たせるわけも行かずに意を決して保護者の方々をお願いをしたところ何度か問答はあったが引き受けてくれることとなった。支えられる側から支える側になった保護者は大活躍であった。と、同時に保護者が日を追うごとに

表情や表現が豊かになっていくことに気づいた。もしかすると、どこかで自分を許すことができ、自分が必要とされているという実感から自尊心が回復していったのかもしれない。

支えると支えられるを混在した共生型サービスが制度の位置づけも伴い、多くの地域で実践されている。私たちが細々であるがいくつかの現場がある。「子どもと高齢者が一緒になればいい」とか「障害者と高齢者がともに過ごすも豊かである」など、支援者のエゴイスティックで展開できるほど平易なものではない。子どもが嫌いな高齢者もいれば、混雑した空間が苦手な障害者も存在する。大切な視点は、一人ひとりのニーズとアセスメントにと基づいたものであるかということである。もちろん、難しい現場なので、トライアンドエラーの繰り返しであるが、致命的なエラーになっていないかを見極める必要もある。そして、お互いの困りごとをマッチングさせることにより互いに効果的な日常を演出することができるか？という視点を縦割りに慣れてしまった専門職が常に意識することが必要であろう。

5. このような時代だからこそソーシャルワーカーの矜持を

私たちは、先述した礎をもとに、平成17年に障害児者の公的サービスと地域におけるあらゆるニーズに応えるインフォーマルサービスを組み合わせたNPO法人を起業することとなる。

起業から16年目を迎えた。わがまちの人口減少や少子高齢化による地域衰退は顕著である。地域の商店街は閑散としており、産業の担い手は不足の一途をたどり、跡取りを見込めない農業者からは憂いの声しか聞こえない。将来に対して漫然とした不安感が漂っている。

この原稿を、いま自宅で書いている。新型コロナウイルス感染対策で在宅リモートワークのさなかである。この原稿が世に触れるとき、どのような社会になっているか想像はつかないが、わずかな短期間なので良い方向に向かっているとは思えない。この間、新型コロナウイルス感染対策で社会

福祉法人の理事長であり、ソーシャルワーカーである自分は、今までにない慌ただしい日々を過ごしている。それでも、何かを進めたという実感が無い。これから襲ってくる経験もなく予想もできない様々な事象に対して、十分な備えもできていない。新型コロナウイルスが収束した後の社会を

想像すると怖さすらある。社会に対して、恐怖を抱くのはこれまた初めての経験である。しかしながら、そうした社会だからこそ、漠然と感覚的なものではあるが、私たちソーシャルワーカーの矜持とは何かを問う時代が到来するのではなかろうか。到来させなくてはならないとも思う。